

分科会 1 1 概要報告書

分科会名	分科会 1 1 イクメン座談会～イクメン実践のすすめとこれからのイクメンのカタチ		
実施日	平成 2 4 年 2 月 1 8 日 (土)	実施時間	1 5 : 3 0 - 1 7 : 3 0
会場	淡海 1 . 2	参加人数	2 2 7 人
登壇者	① 「イクメンプロジェクト」説明：厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 成田裕紀 ② パネルディスカッション パネリスト：京都市立 山階南小学校 教諭 太田 義昭 ：イクメンの星代表 (第一回イクメンの星) 西村貴志 ：イクメン著名人 イクメン宣言者 セイン・カミュ コーディネーター：NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事 イクメンプロジェクト推進チーム座長安藤哲也		

概要報告書

<p>1. イクメンプロジェクトの説明 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 成田裕紀 厚生労働省が「イクメンプロジェクト」を推進する 3 つの理由①仕事と生活の調和、②少子化対策 ③女性の継続就業と現在の男性の育児休業取得率や、男性の育児・家事関連時間などを解説。国がイクメンを推進するにあたっての、両立支援施策の概要を説明。</p> <p>2. パネルディスカッション 安藤座長のコーディネートで、3 人のパネラーがそれぞれ父親 (イクメン) としての日常の生活風景を写真・動画で紹介。 第 1 回イクメンの星、西村貴志氏は、次男が生まれたときに育児休業を取得。週末は子どもたちのサッカーチームのコーチを務めるなどの日常を語った。 北京五輪フェンシング銀メダリストの父である太田義昭氏は、「妻から褒めてもらうこと」でイクメンに。自分が家事を積極的に行うことで家族全体が笑顔になり、イクメンであることが苦にはならなかった。当時の写真を交えながら、一生に一度きりである子育ての楽しさ、トイレにことわざを貼るなど、日常のなかで自然と子どもに意識づけさせる教育方針、美術館などで「本物を体験させる」ことの重要性を述べた。 妻の体調不良がきっかけで「イクメン」になったというセイン・カミュ氏は、家族のための朝食作りの動画を公開。「子どもたちには朝食をしっかり食べさせることが基本」と語る。もともと自分の親が共働きで妹の面倒をみるのが当たり前であったので、抵抗なく育児にも参加できたとのこと。</p> <p>続いて安藤氏が「子育ては楽しいことばかりではない。失敗談などありますか?」と質問。西村氏は、「子どもが失敗したときに『パパに任せないからだ』とつい怒ってしまい、子どもが新しい体験をして成長をする機会を奪ってしまった」と述べた。太田氏がそれを受けて「失敗は当たり前のように毎日ある。子どもたちそれぞれに答えを見つけるいい機会」とコメント。セイン氏も「自分に余裕がないときは、子ども目線になれないこともある。子育ては忍耐力が試される」と答えた。</p> <p>続いて、子育てに参加することのメリットについて展開される。 西村氏は、タイムマネジメント、コミュニケーション能力などのビジネススキルが上がったこと、またベ</p>

ビーサインが有効だったことなどの体験談を語った。太田氏は「自分自身がやりたいことすべてを、子どもを巻き込んでできたので楽しかった」、セイン氏は「地域のパパ同士でコミュニケーションを取ることができ、学ぶことが多かった」と語った。

その他、上手な叱り方では、セイン氏が「ただ叱るのではなく問題をとことん聞き、その原因を懇々と説明することが必要」とコメント。たまには愚痴も言い合える父親同士の集まりに参加するなどの体験談を披露した。西村氏も、フェイスブックなどを活用した「オヤジの会」について説明。また職場でも家庭について語り合えるオープンな環境であることを述べた。

それぞれの教育論が熱く語られた後、会場で質問を募ることに。1人目は看護師の男性から西村氏へ、仕事におけるメリットについてより具体的な話を、というリクエスト。西村氏は前述のタイムマネジメントに加え、一週間の献立作りを通じた「段取り力」、突然のアクシデントにも対応できるようになったというリスクマネジメントについて語った。

2人目は製造業に勤める会社員の男性から。現在、妻が2人目の子を妊娠中のため、上の子（1歳半）の食事を作ったり、お風呂に入れるなどイクメンであろうと努力しているが、ときどきイライラしてしまう。どのように解消したらいいかという質問。

セイン氏は「最初から完璧にやろうと思わないこと」、安藤氏も「イクメンの道のりは長い。がんばりすぎないで、長時間労働など時間の使い方の見直しを」とアドバイス。

会場のイクメンからは「洗濯物をきれいに干せたときに嬉しかったり、スーパーのチラシを見て近所の奥さんたちと語るなど、家族から『おばさん化している』と言われる」という体験談が楽しく語られた。

最後に女性から、「夫婦でパートナーシップを築くためのアドバイスを」というリクエスト。休みの日だけでなく平日からこまめに家事を行うこと、妻のストレス状態を敏感に察知して極限に達する前に解消してあげることなどが挙げられた。

まとめは、会場のイクメンたちへのエール。西村氏から「今しかない育児を精一杯楽しんでほしい」、太田氏も「もう育児は終わってしまったが、本当に楽しかったことしか覚えていない。今苦しいと感じていることも、過ぎると実はとても楽しいこと」、セイン氏は「就学までが大変だけど一番貴重で楽しい時間。瞬間、瞬間を見逃さずに楽しんで欲しい」とコメント。大きな拍手でディスカッションは終了した。

備考

出展ブースに立ち寄ってくれる来場者も多く、「イクメン宣言」も3日間で計38名にいただいた。